Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-25

近代福井県における輸出向絹織物業の急成長と地理的拡大

橋野, 知子

(Citation)
国民経済雑誌,206(2):77-100

(Issue Date)
2012-08

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81008426

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008426

KOBE UNIVERSITY

近代福井県における
輸出向絹織物業の急成長と地理的拡大

橋　野　知　子

国民経済雑誌　第 206 巻　第 2 号　抜刷
平 成 24 年 8 月

近代福井県における輸出向絹織物業の急成長と地理的拡大*

橋　野　知　子

本稿の目的は，1880年代終わりから始まった福井県の輸出羽二重生産の急成長に着目し，そのメカニズムを解明するための基本仮説を導出することにある。羽二重生産の急成長を支えたのは，福井市で開始された羽二重生産の近隣・遠隔の郡部への地理的拡大であり，1910年代には力織機化・工場化をともなう産地内の構造変化が起こった。また，制度・組織的対応や県の勧業政策の影響も大きかった。福井産地にみられたような地域的拡大が，マーシャル的な集積の経済の弱さを表す一方で，産地としてのまとまりは，「ブランドの享受」という集積のメリットの存在を示唆するためのものと思われる。

キーワード　　産業集積，織物産地，集積の経済，絹織物，近代日本

1　は　じ　め　に

工業化の初期の局面から，繊維産業が重要な役割を果たしてきたことは，日本のみならず他の先進国あるいは現代の発展途上国の発展プロセスを観察しても明らかである。なかでも織物業は，マーシャルによる先駆的研究によって指摘されたように，①情報のスピルオーバー，②企業間の特化と分業，③技能労働者市場の発展といった集積のメリットを享受した「産地」を形成することによって発展してきた（Marshall 1920）。

実際に工業化初期の日本においても，政府は，織物業を「重要工業」と認識し，3府18県におよぶ全国の33織物産地に関する調査を行っている（農商務省商工局工務課 1896）。そこでは，産地の起源・沿革，地理的範囲，営業組織，規模，職工，産額，販路等が調べられており，小経営者が狭い地域に集積し，独自の織物を生産する「産地」が歴史的に形成されていったことがうかがえる。また，西陣織物，桐生織物，米沢織物といったように，同調査で産地で生産された製品名を一種の「ブランド」として扱っていることも，一つの特徴である。調査対象とされた織物・産地の多くが明治以前からの歴史を有していた一方，1880年代後半から日本の重要輸出品の一つに数えられるようになった羽二重は，それとは対照的であった。福井県，石川県，富山県，福島県がその産地として調査されているが，生産が開始されたの

は，1880年代の後半から1890年代にかけてである。

本稿は，1880年代後半から1920年頃までの福井県における輸出絹織物業の急成長に着目する。福井県は，1880年代後半に群馬県・桐生産地から輸出絹織物である羽二重の製織方法が伝授されて以降，1890年代半ばには日本一の輸出絹織物生産県となった。その発展の特徴は，最初に羽二重生産が興った福井市から，近隣の地域へ，さらには福井市から離れた地域へと，県下に生産の地理的拡大がみられたことにある。言い換えれば，一つの産地が拡大するのではなく，そこから産地が分散し，さらに大きな産地を形成したということになる。本稿は，このような産地形成・地理的拡大のメカニズムを明らかにするための第一歩であり，福井県における羽二重生産の勃興期から最盛期（1890年代～1910年代）の成長プロセスの把握と整理を目的とする。そのことによって，今後の本格的な統計分析を進めるにあたっての作業仮説を得たい。

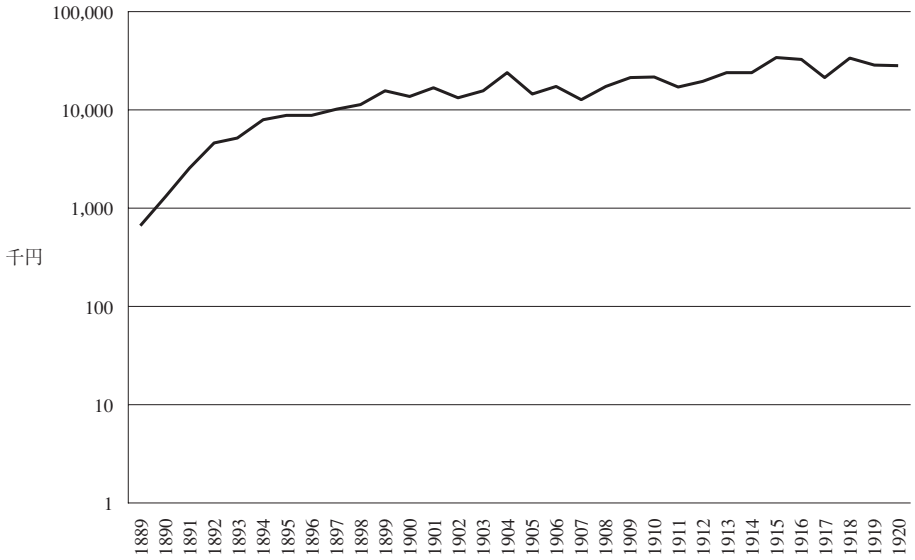
福井産地の発展については，神立（1974）による先駆的研究がある。そこでは，福井県機業の一つの大きな特徴として，産地が農村部にあること，福井市における著しい発展がありながら郡部のウエイトが高まったこと，特に越前平野部（水田単作地帯）への機業の普及・拡大（中小地主の機業投資）が著しかったことなどが挙げられている（神立 1974，p. 195）。また，力織機のいちはやい普及が，海外との競争のなかで重要であった（石井 1965）。さらに従来から指摘されてきた社や産業組合といった組織の役割については，原田（2002）が詳細な検討を加えている。力織機導入期（明治末から大正中期）の工業試験場の機能や産地内での役割については，木村（2002）による内外の技術情報や製品情報の普及という側面からの考察がある。以下では，これらの先行研究の成果をふまえつつ，『福井縣農商工年報』や『福井縣統計書』のデータを観察しながら，第 2 節では羽二重生産の勃興と展開の様子や県の織物業の動向を追い，第 3 節では産地構造の変化について考察する。第 4 節では，本稿の考察をふまえたいくつかの疑問をもとに，基本的な作業仮説を提起する。

2　福井県における羽二重生産の勃興と展開

2.1　輸出羽二重の急増と福井市における羽二重生産の勃興

福井における羽二重生産は，1887（明治20）年，桐生の技師・高力直寛（後の京都市染織試験場長）が福井県に招聘され，福井市で 3 週間の技術伝習を行ったことがその始まりといわれている。従来，越前国では奉書紬の伝統があったが，この技術伝習ならびに京都からのバッタンの導入によって，まずは福井市において羽二重生産が盛んになっていった。日本で初めて輸出羽二重を生産したのは桐生であり（1877年頃），福井県も含め，福島県・川俣（1886年），石川県（1883年），富山県（1889年）が，桐生から間接的・直接的に技術移転が行われた（原田 2002，p. 26）。

図 1　福井県における羽二重実質生産額の推移：1889-1920年

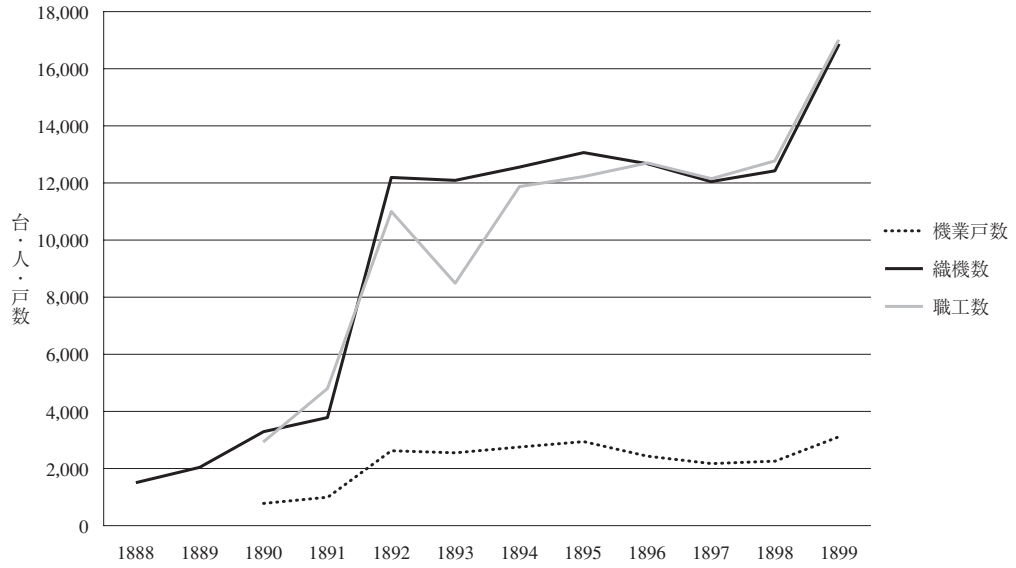


資料：『福井県農商工年報』，『福井県統計書』。
注：実質価格にするために，大川一司他（1973）『長期経済統計　物価』による「繊維製品物価指数」（pp. 192-193）を利用した。なお本稿における表・グラフのもとになった資料は，図 2 および図 7 以外は，『福井縣農商工年報』（1900年まで）と『福井縣統計書』（1900年以降）である。以後，紙幅の関係から各図表の資料を省略する。

日本の羽二重輸出は，1890年代から1900年代中頃にかけて，また第一次大戦期に拡大した（橋野 2007，pp. 81-82）。その輸出額は，1899（明治32）年には1,500万円にのぼり，生糸（6,000万円），綿糸（1,800万円）に次いで，重要輸出品の第三位を占めるに至った[1)]。輸出羽二重の約 7 割は，福井県産だったという（三上・出淵 1900，p. 1）。福井県では，明治以降，輸出向けの洋傘地や絹手巾（ハンカチーフ）の生産が試みられていたが，販路の広い織物を製織することが得策であると考えられていた。図 1 が示すように，1890年代初めから福井県の羽二重生産は急増した。1900年代は，やや停滞期を迎えたが，それはおそらく輸出羽二重の品質に関する海外からのクレーム（後述）が関係しているものと思われる。その後，1910年代から，さらなる成長期に入った。田村（2009）が詳細に説明しているとおり，日本の羽二重輸出の急成長は，西洋における絹の大衆化の進行によって，国際市場が拡大したことによるところが大きい。19世紀後半から20世紀前半にかけての西洋では，薄手で低価格の絹織物，なかでも中国産絹紬や日本の羽二重といった白生地への需要が急速に拡大した（田村 2009，p. 191）。伝統的な産地が主として国内市場を指向していたのに対して，新興産地は大きな輸出市場を指向することによって発展した。

羽二重伝習の後，1888（明治21）年には生産が急増し，まもなく桐生産の羽二重を圧して輸出額も増加した（三上・出淵 1900，p. 7）。羽二重生産が初めて開始された福井市を中心

図２　福井県・羽二重勃興期における機業戸数，織機数，職工数：絹織物，1888-1899年

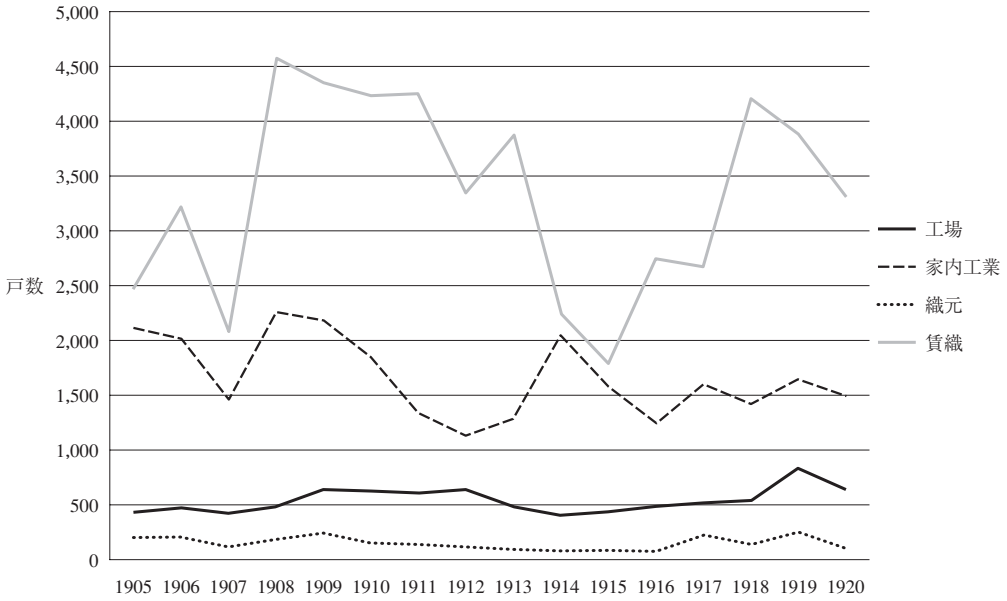


として，生産は郡部にも拡大し，1889（明治22）年には県下の織機数が2,000台に達した。1891（明治24）年に一時に2,000疋の注文があってからというもの，ますます機業は活気づき，農家や商家が急に転業したため，福井市近在では地価の急速な下落さえみられたという。さらに1892（明治25）年，横浜の外商が福井市内に支店を置いてからは，その秋から冬にかけて，福井市内で日々新調された織機は50台を越えたとさえいわれる（同，p. 8）。

図２は，三上・出淵（1900）に掲載されている羽二重生産勃興期の福井県絹織物業における機業戸数の変化，織機（手織機）数，職工数を表したものである[2)]。1891年から92年，ならびに1898年から99年にかけての織機数，および職工数の急増がここからうかがえる。一方，機業戸数は，1891年から92年にかけて約３倍の増加をみたものの，その後停滞し，1898年以降増加傾向にあるようにみえる。これは，20世紀以降，どのように展開したのだろうか。

図３は，1905（明治38）年から1920（大正９）年にかけての福井県の織物業全体における生産組織別機業戸数の変化を表している[3)]。この図には，絹織物業だけでなく，綿織物，麻織物，絹綿交織物などを生産する機業も含まれるので，注意が必要である。神立（1974）によると，麻織物は，輸出羽二重生産の成長によって織物生産における比重は急速に小さくなったものの，その機業戸数は1919（大正８）年において3,259にのぼった。それは，全機業戸数の約５割を占めていた。さらに，機業戸数のうち約７割（2,275戸）が，賃織だったという。その一方で，同年の輸出羽二重生産における賃織業の戸数は，1,164であった（神立1974，p. 187）。よって，この図の賃織には，麻織物の生産者も含まれる可能性があること

図 3　生産組織別機業戸数：全織物，1905−1920年



に留意しなければならない。織元の数は，極めて少ない。この点は，1900（明治33）年の調査が，福井の羽二重生産の特徴として指摘したように，両毛地方にみられた織元（元機屋）がほとんどいないという点と整合的である（三上・出淵 1900，p. 15）。おそらくは家内工業や工場が，好況時に賃織を利用していたのであろう。工場数（職工10人以上作業場）は，500程度で停滞気味である。一方，家内工業（職工10人未満作業場）は，増減を繰り返しつつも，減少傾向にあることがわかる。

図 4 は，生産組織別の職工数である。1900年代後半からの家内工業における職工数の急激な減少，ならびに1910年代半ばからの工場におけるそれの急増が特徴的である。1908（明治41）年頃を境にして，それぞれが対照的な動きをみせている。織元の場合，目立った動きはないが，賃織は先の麻織物の賃織や景気変動を考慮しても，増加から減少の傾向にあることがわかる。図 4 で表した職工数を福井市・郡部という角度からみたものが，次の図 5 である。郡部の職工数の動きは，1900年代後半からの家内工業労働力の激減ならびに1910年代半ばの工場労働力の急増に象徴され，これらのことが郡部での生産拡大の鍵になりそうである。その一方で，県下で最初に羽二重生産が開始された福井市の職工数は，1900年代以降，減少の一途をたどっており，羽二重生産の重心が郡部に移ったことを予想させる。しかしながら，図 6 によると，ほぼ同じだった福井市・郡部の実質労働生産性は，ともに上昇傾向にあったことが知られる。実質労働生産性は，1910年代半ばにともに急増するが，1905年頃から両者に大きな差がみられるようになった。上昇傾向のなかで，福井市は常に郡部の労働生産性を

図４　生産組織別職工数：全織物，1905-1920年

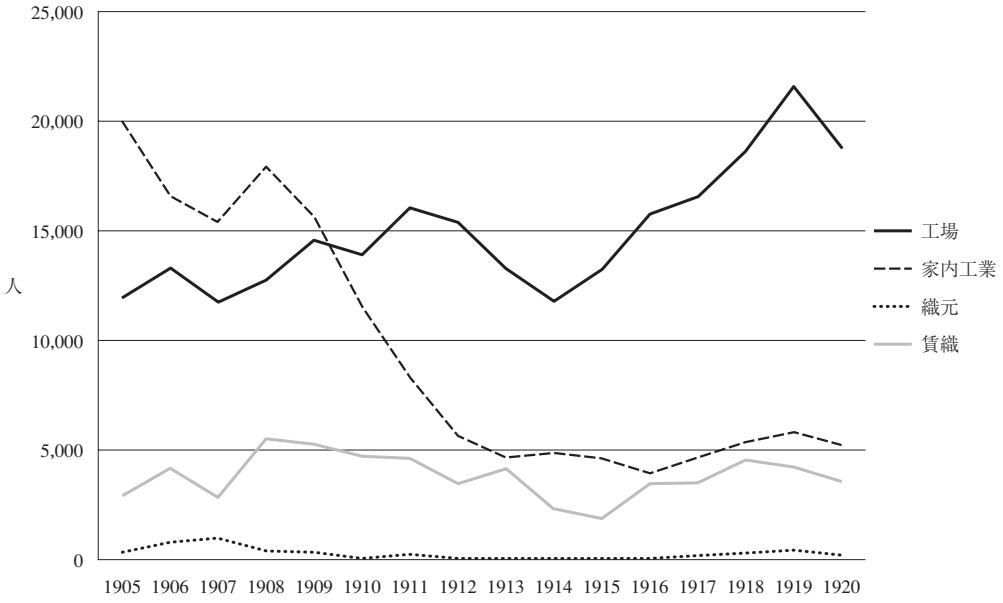


図５　福井市および郡部における生産組織別職工数：1905-1920年

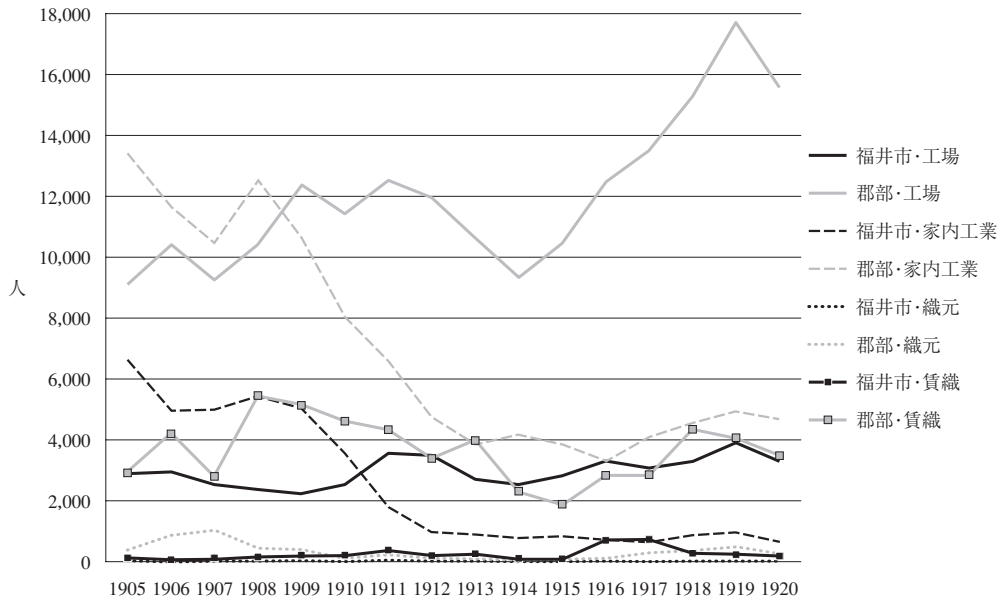
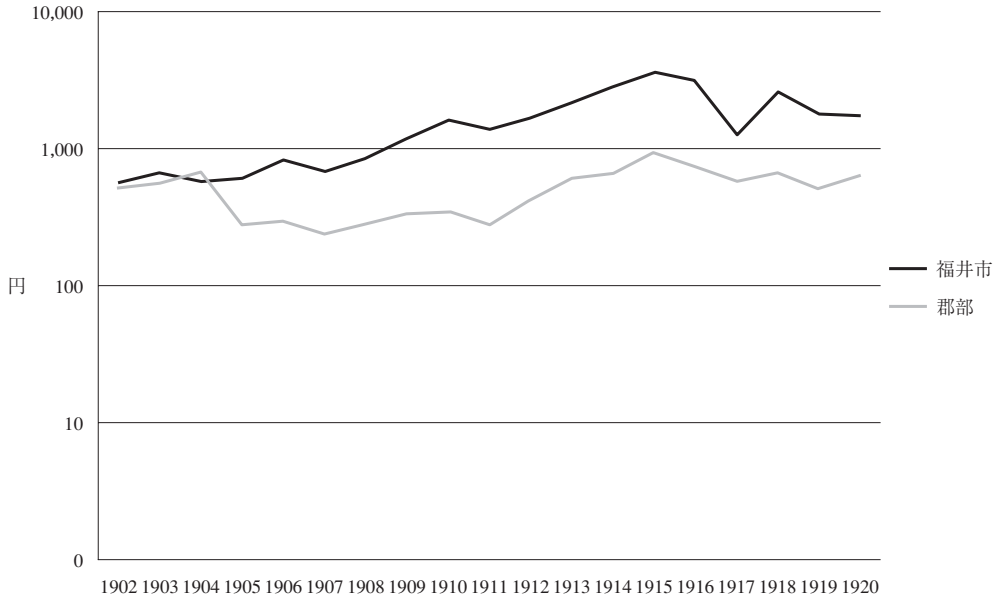


図 6　実質労働生産性の推移：全織物，福井市・郡部，1902–1920年



注：各種織物の生産額を合計し，図 1 の指数でデフレートしたものを職工数で除した。

大きく上回った。

以上，羽二重生産の勃興・成長期における福井県織物業の諸側面を概観したが，そこでいくつかの疑問が浮上する。すなわち，①なぜ賃機・家内工業の職工数が減少し工場の職工数が増加したのか，特に賃織が衰退したのはなぜか，②福井市の労働生産性が郡部のそれを上回ったのはなぜか，そして③なぜ生産が地域的に拡大したのか，といった点である。そこで，次に『福井縣統計書』の郡別データを用いて，これらの問題に接近したい。

2.2　産地の地理的拡大とその構造

図 7 は，羽二重生産が盛んな地域を中心とした，当時の福井県の地図である。1890年代以降，福井市には，横浜の外商や生糸商・羽二重商が集積した。県内の産地も，鯖江・武生・粟田部・森田・勝山・大野・松岡・丸岡・春江といった旧市街や交通の要所を中心にして，郡部へと広がっていったといわれる（隼田ほか 2000，p. 293）。図 8 は，県全体の羽二重生産額に占める福井市ならびに近接 2 郡（足羽郡・吉田郡），近隣 3 郡（坂井郡，今立郡，大野郡），遠隔 3 郡（丹羽郡，南条郡，遠敷郡）のシェアを表したものである。羽二重生産が開始された当初は，その 9 割以上が福井市で生産されていたが，郡部で生産が開始されると，福井市のシェアは急速に縮小した。1890年代，足羽郡，吉田郡といった福井市の近隣の郡部での生産が拡大したが，1900年代以降，両郡の占める割合は小さくなった。それに代わるよ

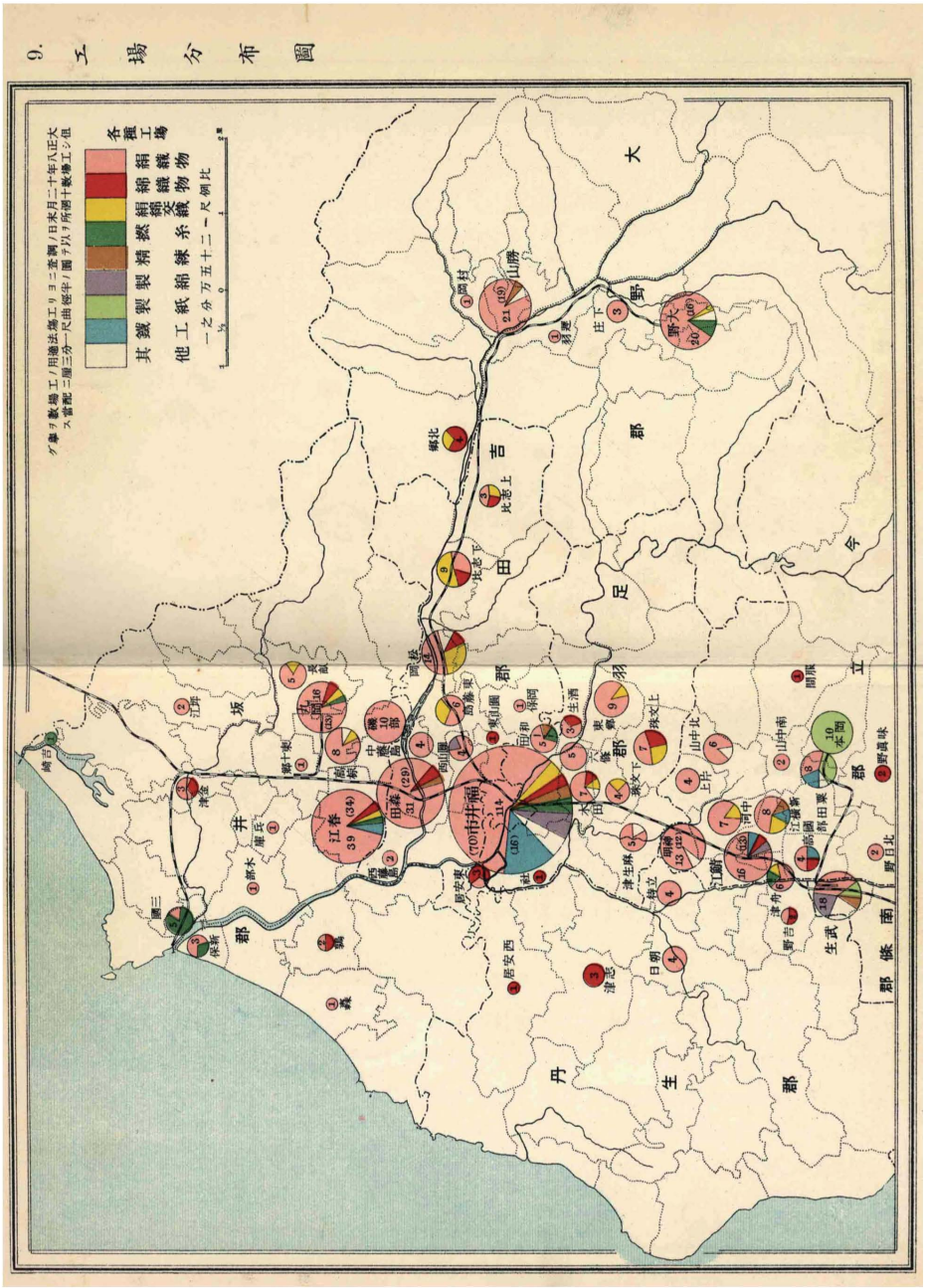
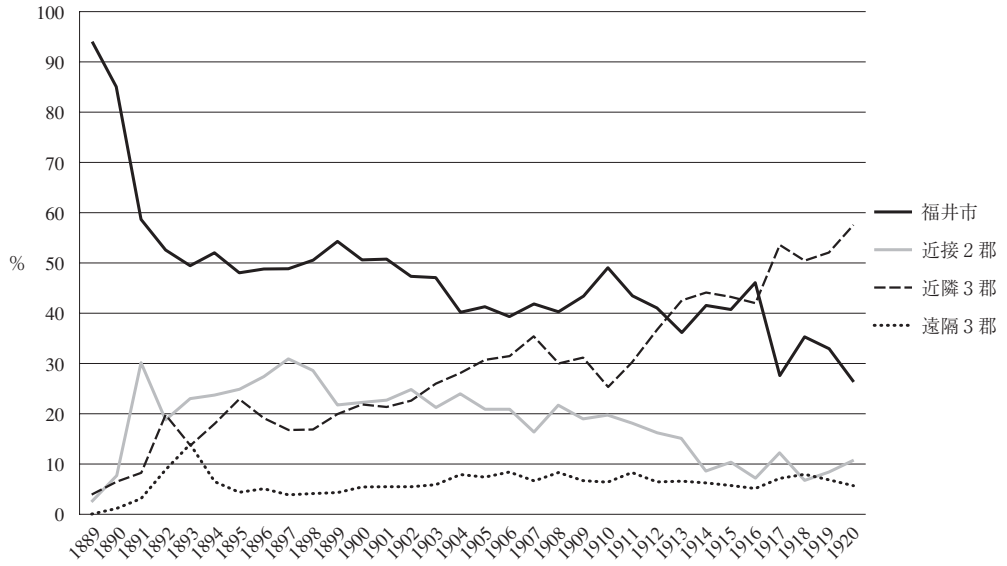


図7　近代福井県における機業中心地

出所：福井縣1922『福井縣史』第3冊第3編。

図 8　県全体の羽二重生産に占める福井市ならびに地域別シェア：地域別，1889-1920年



うに坂井郡，今立郡，大野郡といった福井市からより離れた郡が，1900年代以降，確実にシェアを伸ばし，1910年代後半には全体の半分を占めるようになった。このように羽二重生産は，①福井市，②福井市近隣の郡部，③福井市から離れた郡部へと地理的に拡大していった。

福井縣輸出織物検査所（1911）は，福井県内で輸出織物が盛んになった地域の沿革を伝えてくれる貴重な資料である。その沿革のうち羽二重生産に関する部分を抜き出して各地域別にまとめると，その生産が始まった時期は，以下の通りである（同上，pp. 5-9）。

・福井市

1887年 3 月，桐生町森山芳平の斡旋により高力直寛を招聘し，バッタン機での羽二重生産が伝授された（本県羽二重業の嚆矢）。その後，各自競ってその製織に従事するようになった。精練業者がいなかったため不便を生じ，1877年，染色業者・渡邊清七が桐生で精練方法を習得してきた。

・森田地方（吉田郡）

1888年 6 月，森田村の早見光太郎，後藤亀吉等が加賀の人島田某を招聘し，平時羽二重製織の伝習を受けた。

・鯖江地方（今立郡）

1887年，鯖江町の富永金三郎，酒井伊助，平井亀作，山田武右衛門等が鯖江織物会社を創立し，羽二重業を開始した。同社内に羽二重製織伝習所を設置し，教師を招聘し，希望者に教授して，その生産を奨励した。

・勝山地方（大野郡）

1886年，勝山町の鍋木喜人が生糸製造業の一部を廃して，羽二重製造業を開始した。1892年に廣瀬由松が工場を創設したところ，羽二重業を始める者が増加した。

・松岡地方（吉田郡）

1888年，浅野佐市，吉川寅吉等が平地羽二重の製織を始めた。以来，福井市で羽二重製織の発達をみると同時に年々隆盛に赴いた。

・武生地方（南条郡）

1890年，武生町の粕谷忠勘，河合松平，堀川利平等が輸出羽二重生産が有利であることを知り，手織バッタン機を各一台ずつ据え付け試験的に始めた。

・粟田部地方（今立郡）

粟田部の坪田孫助が1889年に福井市から職工を随伴し，羽二重の製織を始めた。

・大野地方（大野郡）

1890年，宮月開造が勝山から羽二重製織を伝え，製織を開始した。

・春江地方（坂井郡）

1889年，春江村の寺島秀松が 3 台のバッタンを購入し羽二重業を始め，その後開業が相次いだ。

この資料からは，1887年に福井市で羽二重生産が開始されたことと各地域への伝播との関係は不明であり，今後，当時の人的ネットワークの解明が不可欠であるが，1880年代後半から1890年代初めにかけてが，各地域での生産開始期だった。その生産の担い手に目を向けると，多くの郡において，図 9 にあるように1900年代半ばから後半にかけての機業戸数の伸び，1910年代にかけての減少が特徴的である。福井市近隣の足羽郡は，その例外である。アップ・ダウンはあるものの，1900年代後半まで増加の傾向にある。そこで図10で一生産組織あたりの職工数をみると，生産のシェアを伸ばした三郡が1910年初頭から職工規模拡大の傾向にあるのとは対照的に，足羽郡はもともと機業規模が小さく，1904（明治37）年以降，ほぼ一貫して減少・停滞傾向にある。福井市や吉田郡は，1910年代初めまで減少傾向にあり，その後職工規模が拡大するものの，上記の三郡とは異なる動きをみせている。

職工規模は，力織機化とどのような関係にあったのだろうか。図11は，福井市および各郡の力織機化率（全織機台数に占める力織機台数の割合）を表している。力織機化が始まったのは福井市からだが，1910年代初めより大野郡，坂井郡，今立郡，吉田郡の力織機化が進行した。南条郡は1910年代中頃に急速に力織機化するが，足羽郡，遠敷郡，丹生郡の三郡においては，その動きは遅い。先の図10と照らし合わせると，力織機化が機業規模の拡大をともなったことが推測される。逆に，図10における1910年代の職工規模の縮小は，従来の手織機による生産に規模の経済が存在しなかったことを示唆している。

図９　機業戸数の変化：全織物，郡市別，1902–1920年

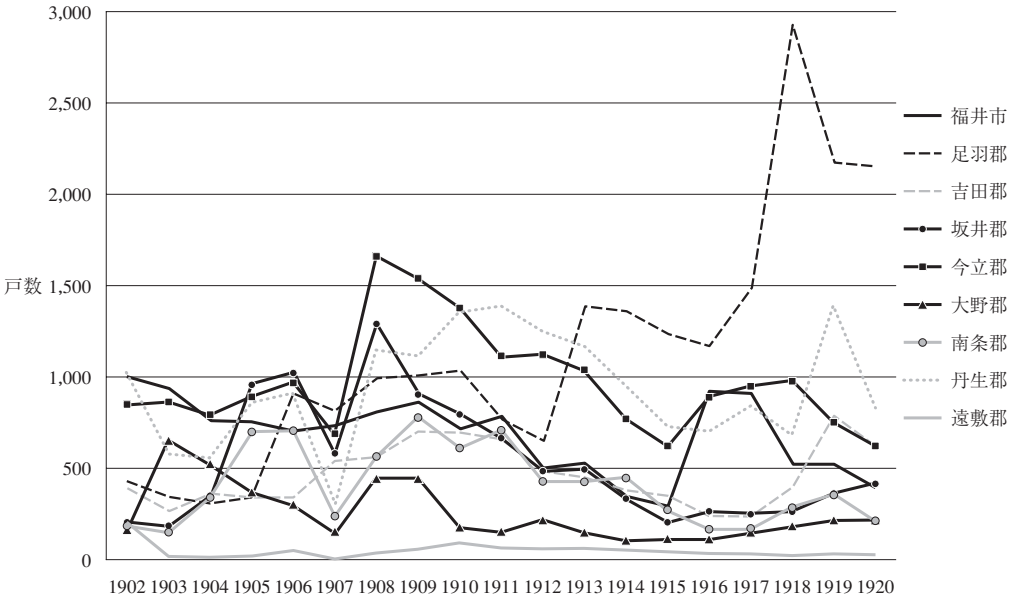


図10　一機業あたり職工数：福井市・郡部，1902–1920年

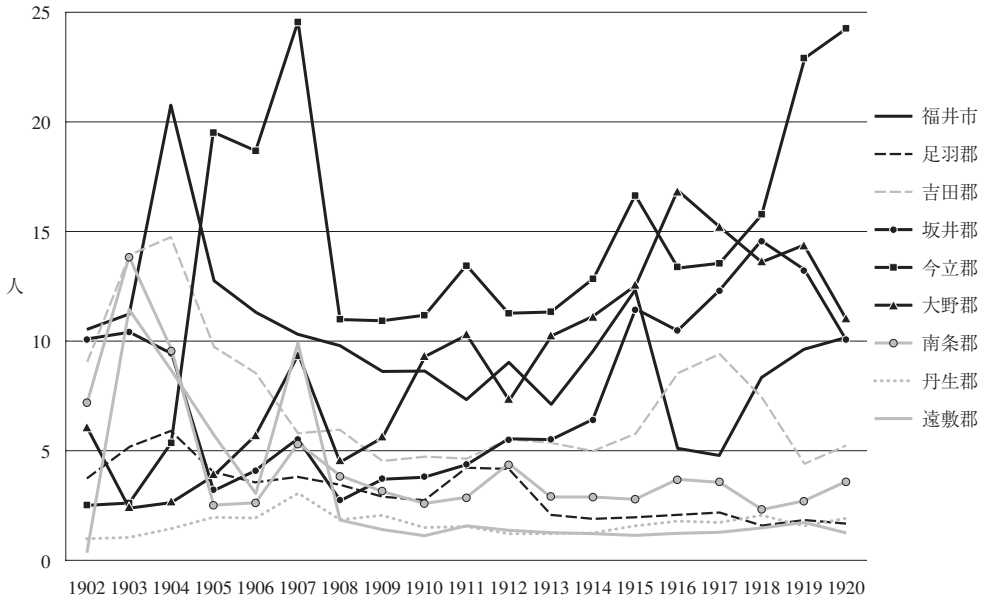


図11　福井市ならびに各郡における力織機化率の推移：全織物，郡市別，1905-1920年

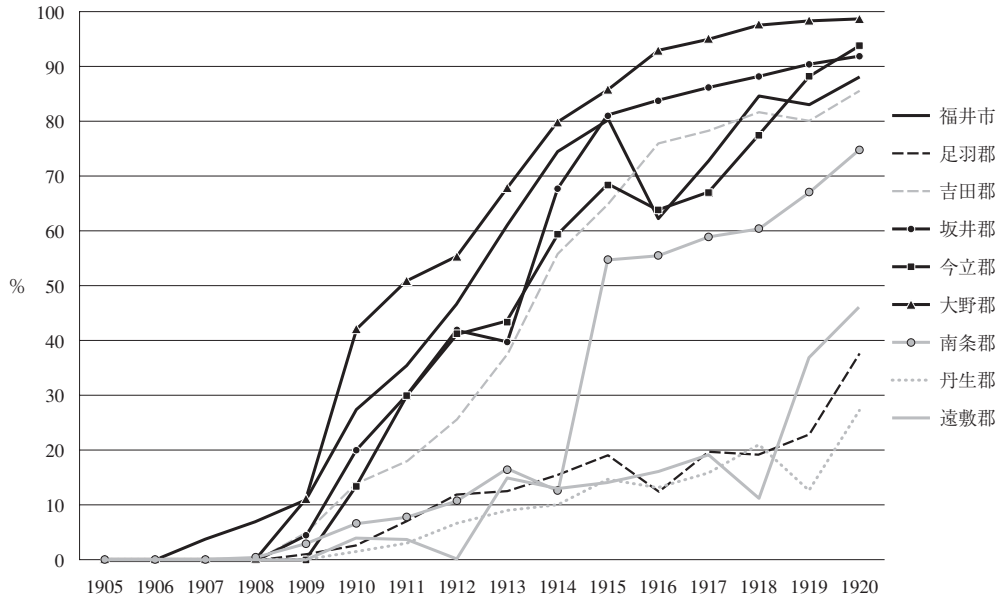


表１　福井市並びに各郡における織物生産額に占める羽二重の割合（%）：1890，1900，1910，1920年

	福井	足羽	吉田	坂井	今立	大野	南条	丹生	遠敷
1890	73.8	61.6	93.9	11.9	21.7	76.9	15.3	0.0	0.0
1900	93.7	86.0	98.9	95.7	93.9	90.1	71.4	36.7	57.9
1910	89.9	66.7	90.2	77.4	91.6	74.2	81.6	77.0	13.0
1920	63.9	38.1	55.9	50.8	87.2	81.0	69.1	66.0	62.6

表１は，福井市ならびに各郡における織物生産額に占める羽二重のシェアを示している。羽二重生産が盛んではなかった丹生郡・遠敷郡を除くと，若干の違いはあるが，福井市や多くの郡において羽二重生産額のシェアの拡大（1890→1900年），縮小（1900→1910→1920年）といった逆Ｕ字型とも呼べる動きがある。これは，羽二重生産の勃興・成長期には，多くの地域で羽二重にほぼ特化した生産を展開し，その後，さまざまな織物生産を手がけるようになったことを暗示するものである（橋野 2007）。

ここまでの観察で確認されたことは，以下の３点に集約できる。すなわち，①羽二重生産の成長期には，織物生産の地理的拡大がみられ，同時に地域における羽二重生産への特化や福井市の生産の比重の低下をともなった。②1910年代後半，福井市近隣の３郡を中心に職工規模の拡大（家内工業から工場へ）がみられた。一方で，職工規模の地域差は大きくなった。

③1910年代初めから，近隣3郡を中心に力織機化が進行したが，力織機化率には地域差があった。このような現象がみられたのは，なぜだろうか。次に『福井縣統計書』の「輸出羽二重調査」に着目することによって，力織機化が急速に進展した時期の郡別の輸出羽二重生産の実態や変化をみてみよう。

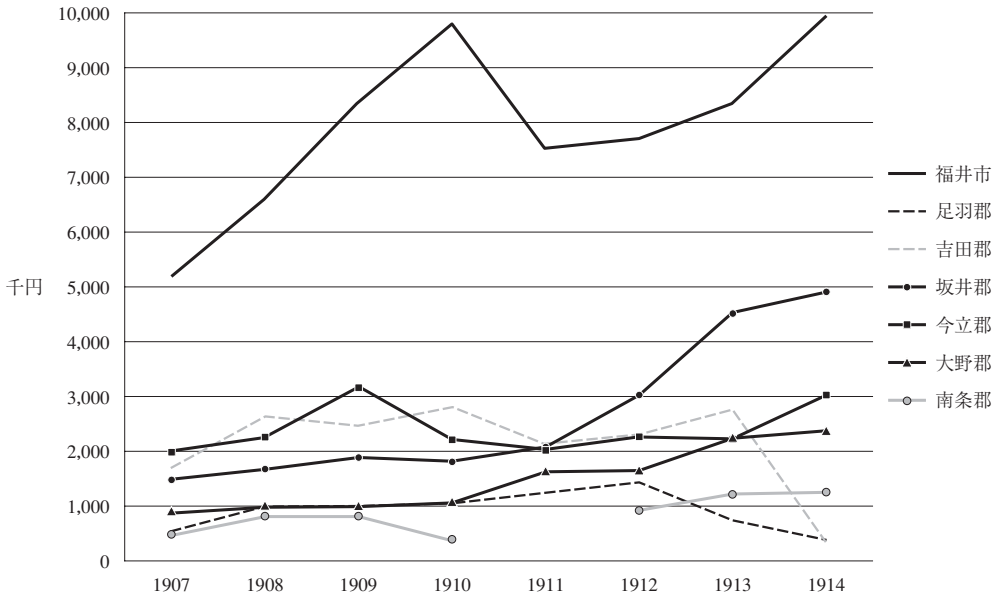
3　産地構造の変化――福井市と郡部との比較から

1900年代後半から1910年代にかけて，『福井縣統計書』の機業調査に「輸出羽二重」に関する項目がある。これは，郡市別・生産組織別に機業戸数，織機数，職工数，生産額等の貴重なデータである（生産組織別生産額は1914年まで）。ここでは，輸出羽二重の主な産地であった福井市，足羽郡，吉田郡，坂井郡，今立郡，大野郡，南条郡に焦点を当てて，工場化，力織機化，生産性について考察する。

3.1　工場化と力織機化

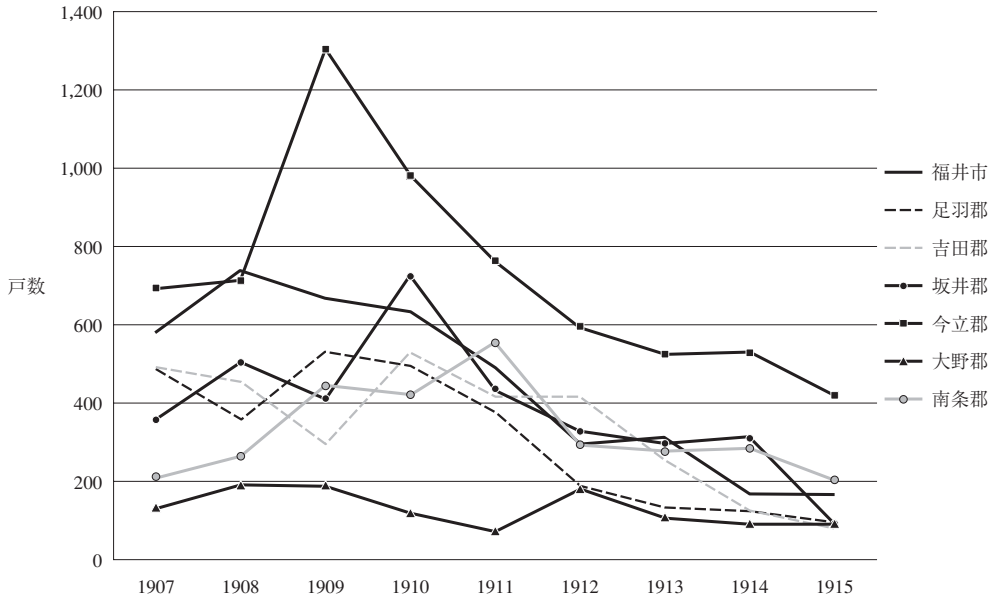
図12は，輸出羽二重の主な産地における輸出羽二重生産額（実質）の推移を示したものである。福井市の生産額が抜きんでているが，吉田郡や今立郡のそれは停滞気味である。その一方で，坂井郡の生産額が大きく成長した。大野郡は1910年以降伸びを示し，今立・吉田両郡と同水準に達した。福井市に隣接する足羽郡は，その生産額を低下させていた。なぜ，こ

図12　羽二重実質生産額：郡市別，1907-1914年



注：1911年の南条郡のデータは不明である。

図13　機業戸数の推移：輸出羽二重，郡市別，生産組織計，1907-1915年



のような変化がみられたのだろうか。

同時期の機業戸数の変化が，図13に表されている。1910年以降，どの地域も機業戸数を減らしているのが特徴的である。とりわけ，今立郡の急増から激減が印象的である。これは，大きく二つの理由による。一つは，図14に示されているように，賃織数の激減にあった。図13と図14の動きを比べてみると，両者が酷似していることが分かる。いま一つは，図15にあるように，家内工業数の減少による。なかでも，福井市，次いで今立郡における家内工業が激減した。例えば，福井市では家内工業の戸数が1908（明治41）年の約500から1914（大正３）年には，100以下へと激減した。これは，家内工業形態の機業が撤退したか，あるいは職工数を10人以上に増やして工場へと変化したことを暗示するものである。工場数自体も1910年代後半から減少の後，停滞傾向にあったから（図16），この時期に家内工業・工場ともにかなりの撤退がみられたと思われる。この点については，『福井縣統計書』にある年次別の個別工場のデータ分析による別稿で議論したい。なお先に述べたように，福井において織元の数が極めて少ないことは，このデータからもうかがえる。よって，賃織に生産を委託していたのは，家内工業や工場だったと考えられる。

上のような生産組織数の変化と同時に，福井市に隣接する足羽郡を除いて，各地域において力織機化が急速に進行していたことが分かる。図17に表されているように，とりわけ大野郡の力織機化は急激であった。次いで福井市，坂井郡，吉田郡が続き，賃織が激減した今立

図14　賃機数の変化：輸出羽二重，郡市別，1907-1915年

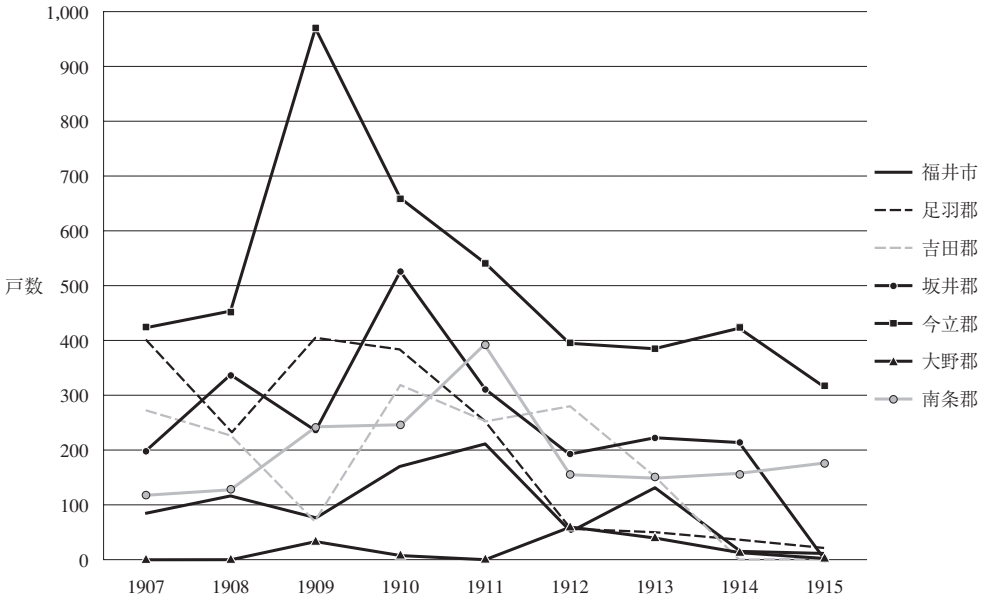


図15　家内工業数の変化：輸出羽二重，郡市別，1907-1915年

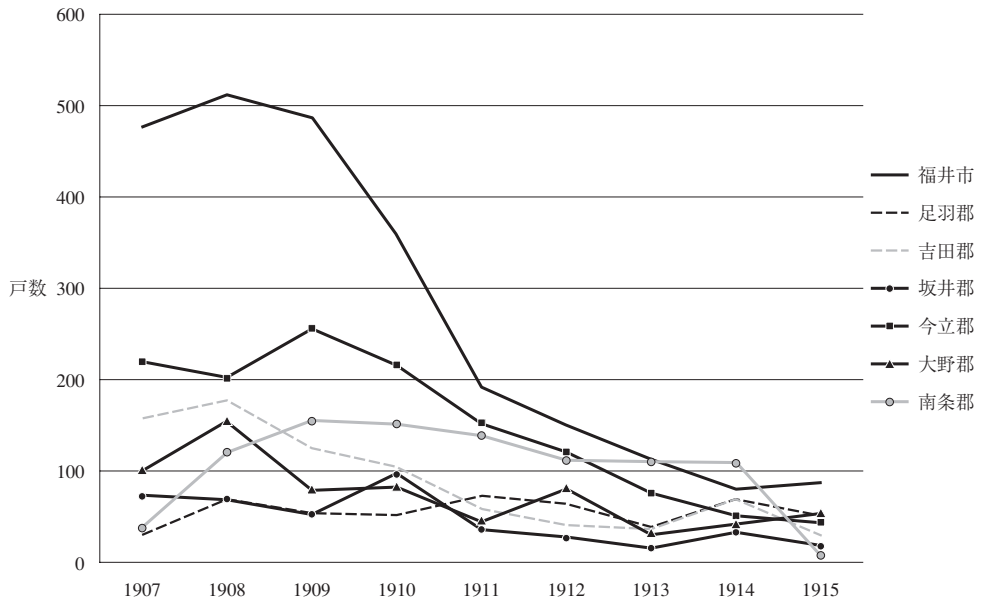


図16　工場数の変化：輸出羽二重，郡市別，1907-1915年

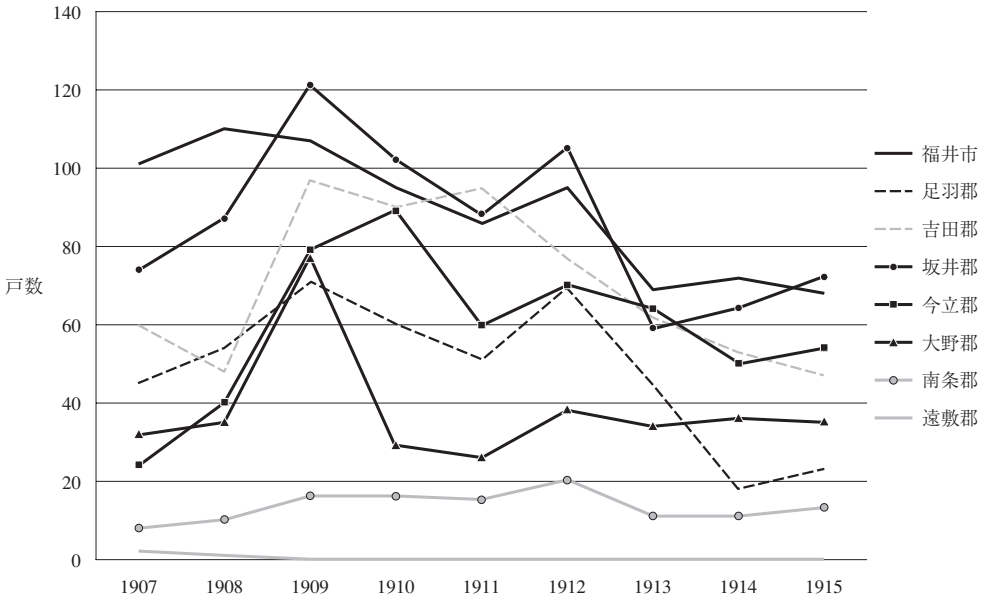
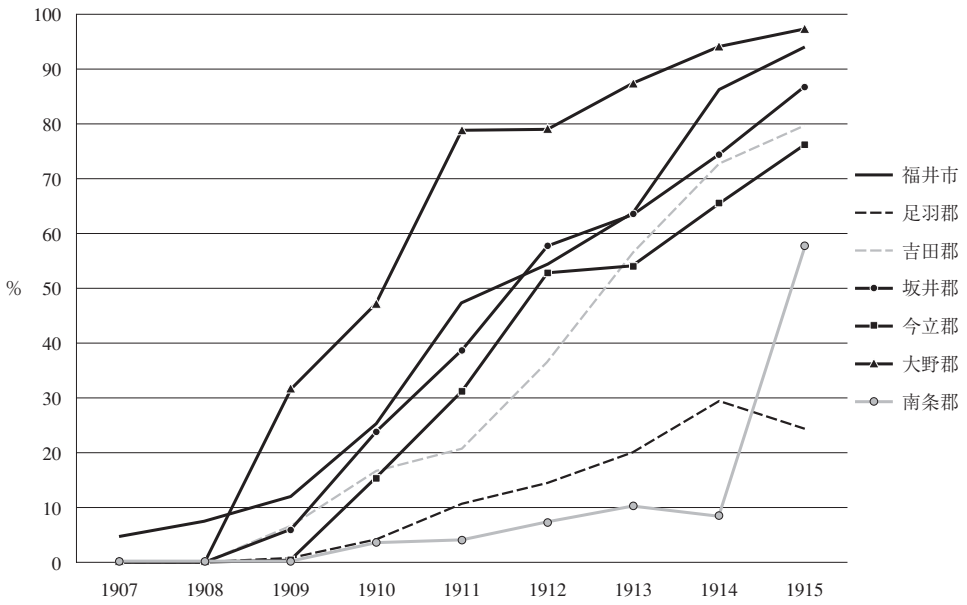
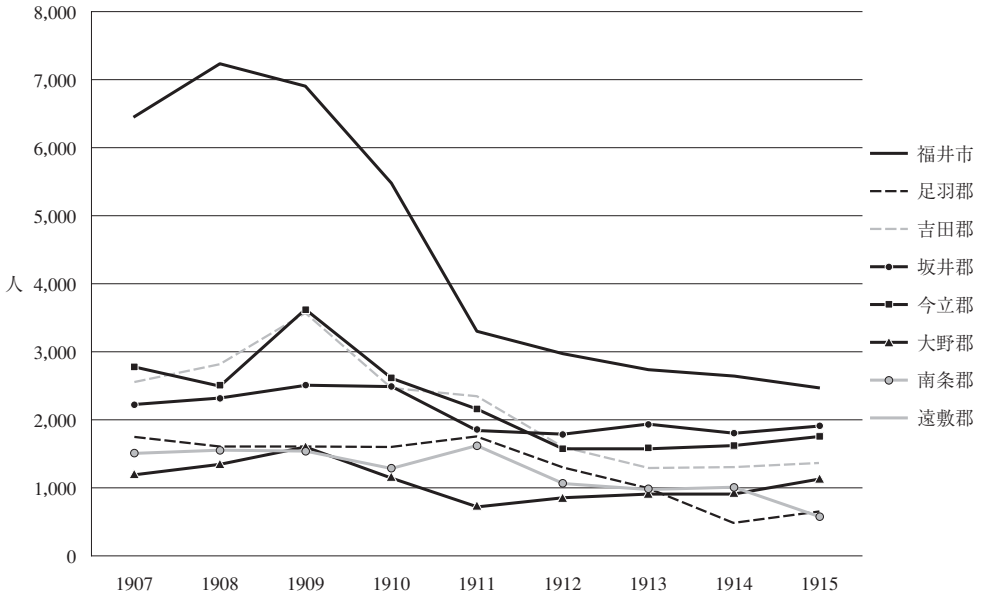


図17　力織機化率の推移：輸出羽二重（生産組織計），郡市別，1907-1915年



注：力織機化率とは，全織機台数に占める力織機台数の割合である。

図18　職工数の変化：輸出羽二重，郡市別，1907-1915年



郡も1915年には力織機化率が70％を越えた。なお，どの地域においても，工場における力織機化率の上昇は，より急激であった。また，力織機は従来の手織機と比べて労働節約的であったから，図18が示すとおり，力織機化率の上昇はどの地域においても職工数の激減をともなった。とりわけ，福井市における職工減は著しいものがある。今後さらに詳細に検討すべき課題であるが，その原因の一つとして，従来指摘されているように賃金の上昇が考えられよう（杉浦 1988，pp. 300-301）。力織機の導入は，失業問題を引き起こしたともいわれる。

3.2　生産性の変化

このように1910年代前半に大きな変化があった福井県下の羽二重生産は，工場生産への集中が進んだ。『福井縣統計書』には，1914（大正３）年まで，地域別・生産組織別の生産額が掲載されている。1907（明治40）年時点では各地域で大きな差がみられた工場生産の割合が上昇傾向にあり（図19），1914年には，足羽郡を除いて70％を越えた。とりわけ，今立郡，福井市，吉田郡，坂井郡の伸びが著しい。大野郡や足羽郡は，早い時期から生産の中心が工場にあったようにみうけられる[4)]。

図20は，同時期の地域別の工場における労働生産性（実質）を表している。この指標も，足羽郡を除いて1910年頃から急激な伸びを示している。これは，力織機化・工場化が進んだことによるものが大きい。神立（1974）によると，1910（明治43）年の福井県では，手織機の場合，一人の職工が１ヶ月で６本製織したのに対し，力織機の場合は一人２台受け持ちで

図19　羽二重生産額に占める工場生産の割合（%）：郡市別，1907-1914年

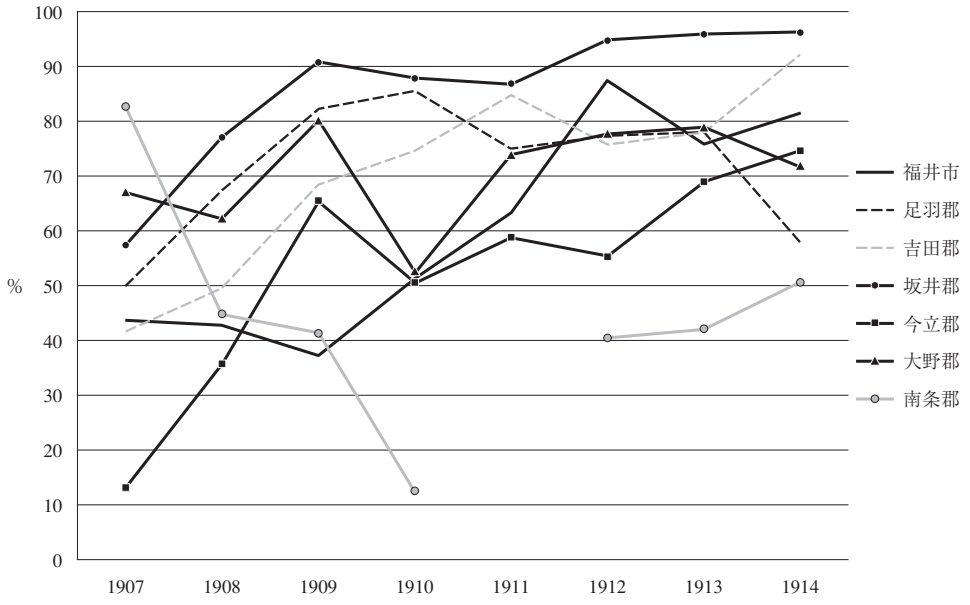


図20　工場における労働生産性（実質，円）：郡市別，1907-1914年

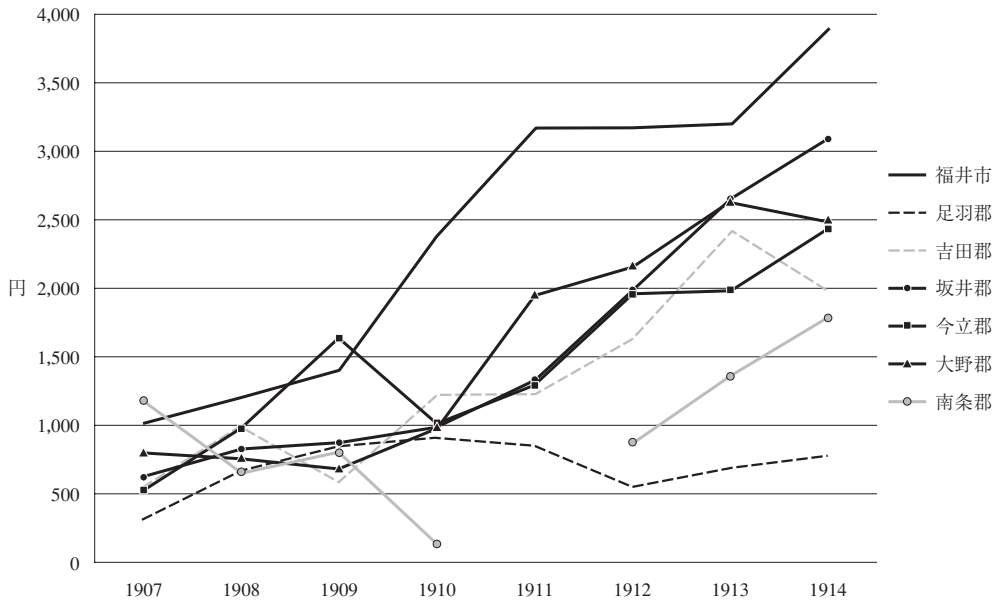
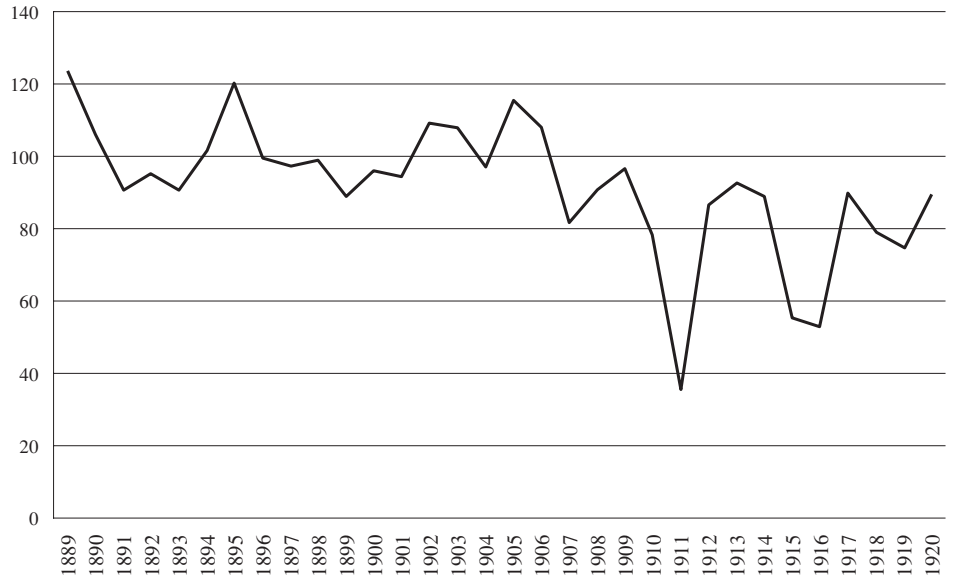


図21　羽二重価格の推移（福井市を100にした場合の郡部）：1889-1920年



15本製織できたという（神立 1974，p. 304）。図20には，以下の三点の特徴がある。一つは，福井市の労働生産性の伸びが速く，その値も他地域を抜きんでていることである。二つ目は，若干の違いがあるが，吉田・坂井・今立・大野郡の動きが似ている点である。三つ目は，足羽郡は他地域とは異なる動きをみせており，若干の上昇の後に低下・停滞していることである。足羽郡の場合は，力織機化の進展の遅さと関係がありそうである。

労働生産性において，福井市とその他の地域との間に大きな差がみられるのは，なぜだろうか。これには，二つの可能性が考えられる。一つは，福井市で生産された羽二重が，他地域のそれよりも高価格だったという可能性である。福井市は羽二重生産の発祥・中心地であり，関連業者も集中していた。また，中央や多方面からの情報を県内でいち早くキャッチすることが可能であった。そのことが，福井市産の羽二重価値を高めたのかもしれない。あるいは，精練工程が品質の差を生み出したのかもしれない。実際，図21に示されるとおり，福井市を100とした場合の郡部の羽二重単価は，低下傾向にあった。また，労働生産性が高いところほど，より多くの賃織を抱えていた可能性も考えられる。なぜなら，『福井縣統計書』における生産組織別生産額をみると，賃織は常にゼロの値をとっており，実際に賃織によって生産された織物は，工場や家内工業（そしてわずかに存在した織元）の生産額のなかに含まれてしまうからである。ただし，福井市はもともと賃織が少なく，近隣の郡部もこの時期大きく賃織が減ったことを鑑みると，前者の可能性が大きいと思われる。

3.3　羽二重生産への制度的・組織的対応――同業組合，「社」，関連産業，勧業政策

羽二重生産の急増を支えたものとして，①同業組合，②社の形成，③関連産業の発達，そして④地方政府ならびに中央政府の勧業政策が挙げられよう。品質の維持や品質問題の解決に対して，組織・制度的対応がとられた。同業組合の活動や関連産業の発達については，以下に述べるように輸出奨励を目的とした勧業政策が大きく影響している[5)]。

既に述べた通り，羽二重生産が始まる前から，福井市を中心として洋傘地や絹のハンカチーフの生産が開始されていた。福井縣絹織物同業組合の起源は，粗製濫造の矯正のために，1886（明治19）年，葛巻包喬の主唱により組織された日新織工組合にある（1887年・絹織物同業組合，1900年・福井縣絹織物同業組合）。1892（明治25）年には，県から年額1,000円の補助を受けて，羽二重検査所が設置された。同年，県令によって定められた福井縣絹織物同業組合取締規則に準拠して，規約が改正され，県下の機業家や精練業者は全て組合に加入することとなった。その際，製品の検査方法が厳密化されることとなり，組合は製品検査の等級を上中下の三つに分類し，松竹梅の証票を添付することとした。松竹梅の組合証票のない製品は売買が禁止され，明治20年代の横浜で，組合証票により売買されていたのは，福井産の羽二重のみといわれる。1893（明治26）年には，組合検査に対する県からの補助金が，3,000円に増額された（福井縣絹織物同業組合 1921，p. 18）。1893年には，福井市に検査所本所，武生・粟田部・鯖江・丸岡・大野・勝山・小浜に出張所が設置され，精練工場から運ばれてきた羽二重が検査された。その後も組合による検査は，多くの改善が重ねられた。しかしながら，「領事報告」が伝えるように，1900年代に日本製羽二重の品質は海外から多くの苦情を受けることとなった。この時期の「領事報告」の記事を追ってみると，羽二重についてはその粗製濫造が重大視され，①劣悪な品質，②検査体制の欠点・証票の信憑性への疑念，③手織機生産による弊害，④商慣習の欠点といった問題点が指摘されていた。さらに，越前羽二重，加賀羽二重，羽前羽二重といった「産地ブランド」を特定しての苦情が寄せられていた。これらの問題をうけて，1909（明治42）年，組合検査は県に移管された。さらには，1911（明治44）年，農商務省によって「輸出羽二重検査規定」が制定され，羽二重検査の統一を図るため，国庫からの補助もなされた（県営輸出検査は，のちに国営となる）。

精練は，羽二重の品質を大きく左右する重要な工程である。既に紹介したように，福井市で初めて羽二重が製織された際には，市内に精練業者は存在しなかった。そのため従来の染色業者がその依頼を受けたが，仕上げが不完全であり，初めは京都に精練が依頼された。その不便を感じ，桐生から精練技術を導入した結果，1893（明治26）年には，県下には14の精練工場が存在するまでになった。精練業者間での仕事の争奪が徐々に激しくなり，練賃の低下や職工の争奪などが起こり，品質が低下したという（精練業者も「練進会」という組合を結成した）。1900年代の粗製濫造問題をうけ，組合による検査が強化される一方で，農商務

省による輸出羽二重取締規則（1905），法律第23号輸出羽二重精練法の発布（1906，精練業は許認可制となる）によって精練工程で使用する薬品や技術・設備に対して，大きな規制が加えられた。さらに，1911年には福井県知事の主導で，精練業者が合同し，福井縣精練株式会社が創立されたのである（創立時は14工場の合併）。その後，第一次大戦後の不況期，1923（大正12）年には，精練業の第二次統合が進められ，福井精練加工株式会社の創立をみた（セーレン株式会社 1990）。このように，羽二重生産の発展を図るために，民間だけでなく地方政府や中央政府が積極的に関与することによって，「越前羽二重」のブランドが育成され，また護られてきたと言える。

最後に，福井産地の際だった特徴として，社の存在に触れておく必要がある。これは，本稿の冒頭で触れた『工業視察紀要』（1896）でも紹介されている。そこには，「福井市並に森田，勝見の二村にては，機業家共同して各自組合を作り市場に類似せる共同売場を設け，毎日六回製品を集め，仲買に売渡すの仕組を成せるものあり。又仲買より注文の出つるときは，組合にて之に応じ，適宜分配して製織せしむるを例とせり。其組合は，同盟社，利厚社，厚利社，一六社，同益社，精絹社，松隆社，〇益社，共益社の九社とす」とある（農商務省商工務局工務課 1896，p. 94，句読点は引用者による。〇は不明）。このような社は，1899（明治32）年には福井県下に18，翌1900（明治33）年に29社を数えたという（三上・出淵 1900，p. 38）。原田（2002）が的確に指摘している，社の四つの機能は以下の通りである。すなわち，①市場を開催し，社員の生産物を共同販売する機能，②社の組織による共同受注機能，③共同受注・販売に基づく製品の統一機能，④代金回収機能である。地域的拡大をともなって成長する福井県下の羽二重生産において，社は小さな「組合」のようなものだったのであろう。社への発注は，まるで大会社に注文するのと同じであるとみなされ，羽二重輸出の有力商社であった三井物産も買い入れにおいて大変便利であると評価していた。

このように機業家が集まった社という組織は，小規模な一機業家（農家の副業として開始された家内工業等）だけならとうてい受注不可能な量の羽二重を集めることを可能とした。そこで，製品は分類・統一されて売買され，また社は，仲買人や問屋からの情報の受け皿としても機能していただろう。社の一つの機能は，規模の経済があったマーケティングを実現したとも言い換えられよう。また，原田による③製品統一機能の一例として，今立郡粟田部村および周辺 7 か村の機業家・精練業者・羽二重商が社員となっていた今立同盟会（1892頃～1899年）の「改良絹織物原料生糸検査所」が挙げられる。今立同盟会は，48の社員から構成されていた（解散時）。彼らが残した「今立同盟会改良絹織物原料生糸検査所・受附表」（自明治25年11月）をみると，1892年11月から12月にかけての 1 ヶ月間に同所に持ち込まれた219疋の羽二重の検査結果が記されていて，興味深い。おそらく，個々の社は，羽二重勃興・成長期において製品の品質を保証するためのさまざまな試みをしていたと思われる。こ

の時期における家内工業等の小規模経営による参入は，社の存在によって可能になったのかもしれない。

4　小　　括

本稿では，近代福井県の羽二重生産の急成長に着目し，『福井縣統計書』のデータから，その地理的拡大や構造変化について検討してきた。西陣や桐生等の伝統的絹織物産地のように，狭い地域に類似の企業が密集している産業集積と比較すると，福井県の羽二重生産にかかわる地域は，やや異質であった。すなわち福井市に始まった羽二重生産は，隣接地域に伝播し，近隣地域にも分散した。羽二重生産の勃興期には福井市の生産が圧倒的だったが，やがて，隣接とりわけ近隣地域の割合が大きくなった。このような動きは，産地構造のさまざまな変化をともなった。1900年代終わりから急速に進展した力織機化は，従来家内工業の急速な減少，職工の減少，労働生産性の上昇とその地域格差をもたらした。ここでは触れ得なかったが，1910年代終わり頃から進展する輸出製品の多様化も，産地構造の変化のなかに位置づけながら，今後検討をしていきたい。また，福井県という大きなくくりでの「産地」の動向を考察する一方で，郡レベルでの「産地」内の動きも同時に追っていく必要がある。福井市から始まり嶺北地方を中心とした福井各地に生産が拡大・拡散した絹織物業は，従来研究されてきた産地織物業とは異質であると思われる（阿部 1989，谷本 1998）。その発展メカニズムを解明することは，重要な研究課題となろう。

本稿の考察をふまえて，今後検証すべき二つの基本仮説を提起することによって，本稿の結びに代えることとしたい。一つは，『福井産地が地域的拡大をともないながら急発展したのは，マーシャルの意味での「集積の経済」が弱かったためである』というものである。マーシャルによる「集積の経済」とは，多くの企業が近接することによって取引費用が下がり，それによって発生する①情報のスピルオーバー（模倣），②活発な企業間分業，③熟練労働市場の発達にあるとされる。現在の途上国経済における情報のスピルオーバーは，創業者的企業の従業員が分離独立（スピンオフ）することによって典型的に起こるという（Sonobe and Otsuka 2006, 2011）。福井の羽二重生産の勃興・発展期を考えると，羽二重が比較的単純な製品であったため生産（製織）技術の習得は容易であり，生産技術が継続的に改善されることもなかった。よって，初期段階では福井市の先駆的企業から市内および市街の追随的企業への情報のスピルオーバーが重要だったとしても，その後はさほど重要にならなかったと思われる。つまり革新的企業群がいて継続的に革新が起こるならば，追随者的企業は近接した場所に立地し革新を模倣する戦略を選択するだろうが，本稿で検討したデータから，福井産地ではそういうことは起こらなかったように推測される。また企業間分業も，先染産地と比較すると，精練工程を除けば決して活発ではなかった（Hashino and Kurosawa 2011）。

製織技術の習得が容易だったことからも，熟練工が決定的に重要であったとは思われない。よって，第 1 の基本仮説は，マーシャルの意味での逆説的仮説となる。

二つ目は，3.3 羽二重生産の制度的・組織的対応で述べた産地ブランドにかかわる。マーシャルは議論していないが，産地ブランドの育成・保護といった第 4 の意味での「集積の経済」が，福井には存在したように思われる。だからこそ，「越前羽二重」という産地ブランドを育成しかつ護るために，県によってさまざまな施策が講じられ，品質の改善がはかられたのであろう。言い換えれば，マーシャル的な集積の経済が弱かった一方で，公共財的性格をもつ「ブランドの享受」という集積の経済があったために，地域的拡大・分散をともないつつも，福井が一つの産業集積として機能したと思われる。これら二つの基本仮説をベースとしつつ，本稿で挙げられたいくつかの疑問点，すなわち①発展初期における生産の地域的拡大，②家内工業と賃織の衰退，③遠隔地域での生産増，④生産規模の零細性，⑤福井市の労働生産性の高さの理由ならびに集積のセンターである福井市の役割を今後具体的に検証していくこととしたい。

注

＊　資料収集にあたっては，柳沢芙美子先生ならびに福井県文書館の方々に大変お世話になったことに感謝する。本稿脱稿後に原田政美先生（福井県立大学教授）より，今後の分析のための極めて貴重な御教示を得た。本調査研究は，日本学術振興会・科研費補助金（A）23243022，（A）22243055，学術振興会委託研究プロジェクト『すべての人々が生涯を通じて成長可能となるための雇用システム構築』（研究代表者・玄田有史東京大学社会科学研究所教授）の成果の一部である。

1）1900年代を通じて，羽二重は，日本の総輸出額の 7-8 ％を占めていた（農商務省工務局調・生産調査会編 1911，p. 2）。

2）三上・出淵 1900，pp. 8-9 の統計表によるが，その出典は不明である。

3）『福井縣統計書』において，工場，家内工業，織元，賃織の四つの生産組織の系列がそろうのは，1905年からである。1907年の賃織と家内工業の数値は，異常値と思われる。なお，府県統計書のデータを整理した研究に福井県（1993）がある。本研究の分析の視点とは異なるが，福井産地の発展要因をほぼ網羅的にとらえている。今後の分析の参考にしたい。

4）『福井縣統計書』では，南条郡の1911年の数値が欠落している。

5）特に断りのない限り，ここでの記述は橋野（2007），第 2-3 章による。

参 考 文 献

Hashino, T., and Kurosawa, T.（2011）“Beyond Marshallian Agglomeration Economies: The Roles of the Local Trade Association in a Meiji Japan: Weaving District（1868-1912）”, Discussion Paper Series No. 1113, Graduate School of Economics, Kobe University.

Marshall, A.（1920）*Principles of Economics*（London: Macmillan, now Palgrave Macmillan）.

Sonobe, T., and Otsuka, K.（2006）*Cluster-Based Industrial Development: An East Asian Model*

(Basingstoke, UK: Palgrave Macmillan).
Sonobe, T., and Otsuka, K. (2011) *Cluster-Based Industrial Development: A Comparative Study of Asia and Africa* (Basingstoke, UK: Palgrave Macmillan).
阿部武司（1989）『日本における産地綿織物業の展開』，東京大学出版会。
石井寛治（1965）「絹織物輸出の発展」，横浜市編『横浜市史 第４巻 上』。
大川一司ほか（1973）『長期経済統計８　物価』，東洋経済新報社。
神立春樹（1974）『明治期農村織物業の展開』，東京大学出版会。
木村亮（2002）「福井織物産業集積における『テクノロジー空間』の形成――力織機導入期の福井県工業試験場を中心に」，『地域公共政策研究』6，pp. 1-24。
杉浦芳夫（1988）「絹織物工場における電動機の普及――福井県嶺北地方の例――」，『経済研究』39（4），pp. 298-307。
セーレン株式会社編・発行（1990）『セーレン百年史――新たな飛躍・新たな挑戦』。
谷本雅之（1998）『日本における在来的経済発展と織物業――市場形成と家族経済――』，名古屋大学出版会。
田村均（2009）「欧米市場における日本羽二重の動向と競合品――19世紀末～20世紀初頭」，『埼玉大学紀要　教育学部』58(1)，pp. 191-207。
農商務省工務局調・生産調査会編（1911）『輸出絹織物調査資料』。
農商務省商工局工務課編（1896）『工業視察紀要』上・下。
橋野知子（2007）『経済発展と産地・市場・制度』，ミネルヴァ書房。
隼田嘉彦・白崎昭一郎・松浦義則・木村亮（2000）『福井県の歴史』，山川出版社。
原田政美（2002）「明治・大正期羽二重の流通――社と産業組合」，『地域公共政策研究』6，pp. 25-36。
福井県（1993）『福井県史資料編17 統計』。
福井縣『福井縣農商工年報』（各年版）。
福井縣『福井縣統計書』（各年版）。
福井縣絹織物同業組合編・発行（1921）『福井縣絹織物同業組合創立三十五周年記念　三十五年史』。
福井縣輸出織物検査所編・発行（1911）『福井縣輸出織物検査一覧』。
三上孝司・出淵勝次（1900）「明治三十三年福井石川両縣下機業調査報告」（高等商業学校）。